

特集：古川プロジェクト

調査報告

矢作川とひとの暮らし

Change of the everyday life in the Yahagi River Basin

1. 川の流れ 課題と方法

1. The River Flow : Purposes and Methods of the Study

川田 牧人

Makito KAWADA

1. 暮らしと歴史、その語り

そもそも「昔はアユがよく釣れた」とか、「近年はさっぱり釣れなくなった」というのは、いかなる言語表現であるのかという点から考えたい。このような表現には、ある生活上の行為を比較の規準として現在と過去の一時点を比較するという作用がまず認められる。しかしそれだけではなく、一義的にはアユを釣る行為そのものに対する評価であることは確かなのであるが、それ以上に生活の総体もしくはある部分に対する総合的な評価となっていることに気づかされる。つまり「もういちどアユが釣れるようにしたい」というのは、アユが自然に釣れていた頃の暮らしがよかったという生活実感に裏打ちされた主観的評価を多分に含んでいるわけである。そこで、「ながれ」をとりもどすというプロジェクトの目的について、歴史的記憶の想起という側面と、生活への評価という側面の二点からアプローチが可能であろうと考えられる。

まず歴史的記憶の想起の方からとりあげたい。歴史的記憶の想起といっても、もちろん過去のある時点での生活状態が想起されるわけであるから、生活への評価という第二の側面と切り離せないことはいうまでもない。われわれが過去の語りを歴史的記憶の資料として用いることができるのは、まさに、想起と評価という作用が関連しているからである。

民俗学者・柳田國男は、次のように述べている。「我々の学問は結局世のため人のためでなくてはならない。すなわち人間生活の未来を幸福に導くための現在の知識であり、現代の不思議を疑ってみて、それを解決させるために過去の知識を必要とするのである。すなわち人生の鏡に照してわが世の過去を明らかにせんとする、歴史の

究極の目的は眼前にぶら下がっているのである」（柳田、1990 [1935] : 30）。ここには柳田の、いわゆる「経世済民」もしくは「学問救世」の思想を読みとることができ、その線の上にムラの歴史を知ることの意義が見出されているが、ここで想定されているのは、われわれの日常の生活の過去、いわゆる生活史であって、このわれわれ自身の生活史の知識をもって将来をより幸福な状態へと切り拓いていくことの必要性を説いている。柳田はまた別のところでは、「生活なるものが、目下刻々にもまた変遷しつつあること、これは村民ならばいずれもよく知っています。それがまた旅人にとっても、やはり非常に面白いいわゆる近世史であるのです。歴史というとフンなどと笑う輩は、歴史がこれほどの幅を持っていることを知らぬから笑うのです。日本武尊と弘法大師が来て、一晩ずつ泊って行かれたような話だけが村の沿革でありますならば、なるほどフンであるかもしれませぬ」（柳田、1990 [1922] : 61-62）と述べているが、この指摘は実的確であろうと思われる。じっさいに過去の生活の聞き取り調査を実施しようとする時の問題の一つは、当該地域住民自身が「ここにはとりたてて歴史がありませんから」という認識に立つことである。それは政治史に名を連ねるようないわゆる「歴史上の人物」が往来するような歴史を想定し、それに対する遠慮・謙遜の表現で述べられることが多いわけだが、この点を柳田は、「歴史上の人物」が登場する歴史ならむしろ「フンであるかもしれませぬ」と退けているところが小気味よくさえある。

では柳田の構想した郷土研究、この「流域の調べごと」とでも言うべき本プロジェクトにとって必要な歴史とは、どのような歴史であろうか。柳田は郷土研究の要件として、「一、最終の目的はどんな大きくてもよいが、研究の区域はできるだけ小さく区画して、各人の分担を

もって狭く深く入って行くこと。二、その便宜のためには、なるべくは自分の家の門の前、垣根のへりから始めて、次第に外へ出て行くこと。すなわちよくわかるものから解らぬものへと進むこと」⁽¹⁾ (柳田, 1990 [1927]: 310)といった条件をあげている。柳田の場合、このような提案の背景には「国民生活(変遷)誌」の想定があるわけであるが、ここではまず、身近な限られた範囲にある具体的なものの変遷に敏感であるべしという範に傾聴しよう。日々の暮らしの中で、矢作川とのつきあいという生活実践が変化してきたというのは、それが漸次におこる目立たないものであるほど、激烈な歴史の変化とは捉えがたいものであるように見えるが、じつはこの暮らしの変化こそ住民にとって重大で重要なもののはずである。古単プロジェクトでめざしている歴史的記憶の想起というものは、まさにこのような目立たないゆっくりとした変化に自覚的になることである。柳田の想定していた「国民生活変遷誌」といったものが最終的には国全体を巨視的に捉えることになるのも、ある地点を境にドラスティックに視点が変化することではない。矢作川をめぐる日常生活の漸次的な変化に敏感になり、それを詳細に再構成してみると、日本全体における流域社会の破壊と消滅、そしてそれが新たな社会的コンテクストによって再び意義づけられる経緯について考える材料を手に入れることができる。

日常生活の漸次的な変化を捉えることが柳田のいう郷土研究の主眼であったとすれば、後の民俗学において主要な位置を占めることとなった「民間伝承」という概念について再検討することが必要になろう。この語について柳田自身は、「提案者の本意を告白するならば、これを欧羅巴大陸若干の旧国において、Les Traditions Populaires などと知っている一団の知識と、出入りなく一致せしめるをもって便利とし、さらに現在これとほぼ同義語のごとく解せられている英人のいわゆる Folk-Lore とも、範囲を同じくするものと認められんことを欲して居るのである。トラディションといふ語は、その本国においてもいろいろ政治上の連想があつて困ることは、日本今日の「伝統」という訳語がこれを推測させる。それでポピュラーという形容詞に、非常に重きを置いてもらうことになっているのだが、我々はそれを「民間」としか表現し得なかった。その代りに新たな感じのある伝承といふ語をもって、情実纏綿する伝統にさし替えることができたのである」⁽²⁾ (柳田, 1990 [1934]: 256-257)と解説している。ここに上述のような生活変遷誌の着想を重ね合わせれば、「伝承」というものが固定的に伝達・

継承されるものではなく、むしろ生活の現場で随時、臨機に生活上の便宜に応じて組み替えられる柔軟なものとして概念化されていたことが理解できる。伝承のもとの原語が Tradition であったということから、現今の人類学における伝統の創出論にも通じる論点を見出すことができるが、むしろ漸次の変化にたいして臨機に柔軟に対応していく日常の実践活動の本源に、伝承という作用を見出すことができるのではないだろうか。

であるとすれば、生活実践を古来より機械的に伝え来たった知識の集積として固定的に捉えるのではなく、その時代ごとにいかなる個別の知識や技術を取捨選択しながら組み合わせているかという、知識の日常における運用の問題として視点をひらくことができる。これはいわば生活変遷誌の微分的アプローチともいうべき方法である。たとえば「アユがたくさん釣れた」という過去に対する想起の言説は、いかなる生活環境の認識や生活技術の組み合わせから発せられるものであるかを詳細に記録していくアプローチである。すなわち歴史的記憶の想起という点に関して、柔軟で創造的な日常知の運用という視点から「ながれ」を立体的に組み立てることによって、「むかしの暮らしの知恵」は単に懐古的な遺物ではなく、われわれの生活の将来を見据えていくために欠かすことのできない生活変遷誌の重要な資料となるのである。

2. 「暮らし向き」の測定

さてもう一点の、生活の評価という点に関して検討しよう。生活の評価とは、たとえば「むかしはアユがよく釣れたが、最近ではさっぱり釣れなくなった」といった表現であるが、自ら(の過去)の暮らし向きについて、何らかの判断を下すようなある主観的な評価をしているということである。主観的評価・意識を対象化するための「暮らし向き」という語(とそれにとみなす問題設定)は鈴木寛之から借りている(鈴木, 1998: 115-129)。鈴木論文から読みとれることは、暮らし向きに対する主観的評価は、過去が「よかった」が今は「悪くなった」とする、あるいは逆に昔は「苦しかった」が今は「楽になった」とする、などの相対評価に特徴があることである。さらにいまひとつ、「暮らし向き」に対する評価の一方で、「世の中の良し悪し」が判断されることがあり、こちらは作物の豊凶など生産活動と密接に関連した評価であることが指摘されている。

人文社会科学において、このような生活の評価について積極的にあつたものは少ないが、『山村生活の研

究』における大間知篤三の記述は参考になる点が多い。この主要部は上記鈴木論文に詳しくまとめられているのでここでは省略するが、本稿の視角から2点ほど注目される点を指摘しておきたい。

まず第一点は、「此種の問題に対する答は、話者が良き伝承者であった場合にも、主観的色彩が濃厚であり、個人的家族的生活条件に影響されがちなのは当然であろう。其点一つ一つの答には真実性を欠くことがあるかも知れないが、多数の答を比較総合することによりかなりの確実性は保証し得るのである」(大間知, 1975[1937]: 17) という冒頭の記述である。一読すると、インフォーマントの語った内容の真偽は定かではないが、数量的保証でもって確実視できると述べていることから、大間知はこの記述を資料の取り扱い上の注記として記しているように推察できる。しかし客観的立場から判断ができないものであるがゆえに「暮らしよかった」という実感には重要な意味があるというのが、筆者の基本的立場である。

そもそも、アユがよく釣れたので暮らし向きがよかったとか、釣れなくなったので悪くなったといった評価は、真偽を確定しうる命題とはなりえないと考える。真偽の確定も反証もできないというのは、いみじくも大間知が「個人的家族的生活条件」と述べているように、暮らし向きがよくなることで享受できる利益・効用が限定された範囲において措定されているからである。しかし本研究プロジェクトの場合、個人と家族という眼前の実体だけが利益享受の主体ではなく、矢作川という流域社会(空間的広がり)や、河川環境を遺すべき子孫(時間的広がり)というように広がりを持っている。また、享受主体が広がりを持って想定されるがゆえに、きわめて主観的な生活の評価であってもその主観は時間的空間的に拡大されていくのであり、「ながれ」を考える重要なとっかかりとなるのである。とりわけ、「アユがふんだんに獲れたような豊かな矢作川を次代へも受け渡したい」という願いは往々にして聞かれるが、これはいわば将来への投資、利益・効用の超世代にわたる享受である。ここには、個人が利益・効用を最大化するような合理計算をするという近代経済学的行動原理には、必ずしもあてはまらないことであるかもしれない。しかし幸福の語りは、本人自らが直接手にすることができないものであったとしても、ありたきものとして語りうることができる。したがって暮らし向きの良し悪しの語りは、時間的空間的広がりを持った主観性の語りとして、望ましい将来への投機的言説として対象化することができる。またここに、前項

であげた柳田國男の「人間生活の未来を幸福に導くための現在の知識」の意義があるはずである。

もう一点、大間知の記述において注目すべきは、暮らしよかったとされる内容である。主収入源以外に臨時にそして自由に物資を採集できる共有地や共有林での活動が、生活に潤いを与えていたという記述である。新潟県東川村では部落有地が村に統一されたため、また三重県森村の蓮部落では以前は20軒でもっていた共有林が村全体のものとなってしまったので、生活が苦しくなったといわれる。暮らしがよかったという実感をもたらすものとして、このような自由な経済活動が想起されていたのである。ここに、本研究プロジェクトの課題である「昔はアユがよく釣れた」という項目を並列させてみることも可能ではなかろうか。これらはもちろん、主たる収入の途が断たれてしまうような事態ではないが、むしろ、あっさりと言語化できてしまうほどの内容は死活問題ではないから重要性がないといいたいわけではない。暮らし向きの良し悪しの評価は、このような直接生死に関わる問題ではないような生活上の機微にまで細やかな評価がなされていることの証左でもあるし、よしんば最低限の生活保障がなされたとしても、暮らしのふくらみでもいうべき部分がなければ人間生活は総体として、いかに豊かさを欠いたものになってしまうかを雄弁に語りうるものではないだろうか。そしてまた、このような主収入源にはなりえない活動は、効用を最大化するという経済原理からは推し量ることのできないものであろう。この点からも、個人の利益・効用の最大化という一点だけからは理解しきれないような望ましい将来像についての語りは、本研究プロジェクトで追究すべき最重要事項であった。

3. 歴史的記憶と景観の想起術

ここでは本プロジェクトにおける方法論的展開について、若干の展望を示しておきたい。先にも述べたとおり、歴史的記憶の想起は単なる昔語りではなく、現在の暮らし向きの評価および将来への企図を含みこんだ言語表現として考えられる。この言語表現が主体的な歴史の語りとなりうることは、認知心理学における記憶研究の概略をたどることによっても理解できる。それによれば、人間の記憶システムは一連の記録—保持—想起、というプロセスをたどり、最後の段階である想起が不可能な状態が忘却であるが、これが想起不能であるのか記憶内容の消失であるのかには議論がある。記憶喪失患者の側頭葉

に電気刺激を与えた実験では患者が幼少時代の経験を語りだすという結果が得られ、永久貯蔵としての記憶の側面が指摘されたが、これが過去の経験の追体験である保証はなく、むしろ再構成されたものであるとの解釈が成り立つ。また想起に成功した場合でも、①省略、②合理化、③強調、④細部の変化、⑤順序の入れ替え、⑥被験者の態度、など想起内容が加工される要因が幾重にもかさなり、事実の正確な再生であるとはいえない（高野編、1995）。つまり想起にせよ忘却にせよ、何らかの作用が働いていることが想定されるのである。

阪神淡路大震災の際、事後に「今にしてみれば」的な前兆証言が数多く寄せられた。これを分析した大橋靖史によれば、このような想起がなされるということは後に起こった出来事（大地震）によって、普段と変わらない生活上のシーンが意味づけられたということであり、意識的になされた記銘とはいえないという。このような想起は、出来事の異常性（大地震）と経験者である自分の客観性（冷静な観察）とを同時に満たし得るような言説をともなった、つまり聞き手を納得させるためのコミュニケーション回路を経た想起である。集合的な記憶／忘却はこのような大事件の証言だけでなく、日常における過去の語り（オーラル・ヒストリー）、伝統や慣習についての言及などにも見出せるが、ようするに社会的実践というコンテクストに照らしてこのコミュニケーションの意図・目的を考えれば、想起や忘却は、アイデンティティと共同体の統合という「認識的企て」が関与した「社会的構成（social construction）」なのだといえる（大橋、1996：69-103）。

社会的に構成される想起や忘却の問題は、過去の客観的な「事実」であるとか、あるいは全くの「捏造」であると断じてしまうのではなく、一定の社会関係の中で具体的にやりとりされる知識の相互交渉の様態としてとりあつかうべきである。過去の知識を忘却することによって現在の状況に何らかの影響を及ぼしうる力を発生させるのは、社会的文脈にもとづいて認識的企てを明らかにすることであり、社会的に構成された過去に関する「知識の政治」を問うことでもある。ここには、歴史が客観的な事実であるか否かを明らかにしたり、ごく一部の為政者による歴史叙述とは一線を画した方法を、流域の調べごとにもたらすことになる。

たとえば、『田主丸町誌第一巻・川の記憶』（福岡県浮羽郡田主丸町）はその好例といえるだろう。この町誌が提起する歴史観は、上述したような想起という精神活動に最も近い立場をとる。それはまず第一に、文字による

記録を生活の公的な側面に限定された歴史として、その記録からはもれてしまう事象をも対象化する。そして第二に、人々の暮らしとその変遷自体を歴史と見なす、という立場である。ここには、人々による変化の表現は、歴史そのものであるというよりは、歴史意識を対象化するものであるという前提があり、さらには、意識化され語られることに意味が付与されるというファクターが避け得ずに介在している。この町誌が「川の記憶」というタイトルを冠されているのは、このような筑後川水系の物語世界を、その場に住む住民にとって意味あるものとして読み解いていく視点を反映したものであることは論を待たない。

このような田主丸町の事例をここで取りあげたのは、それらとまったく同質な聞き書き資料が古冊において得られるという意味においてはではない。むしろ、個々の聞き書きが、その土地の歴史と個性を担うという方法論上の基本的視角を共有したいのである。田主丸の場合、地方史の微細なストーリーを事細かに吸着していく磁場としての河童伝説は、これらの語りの凝集点として有益であったであろう。しかしこのような突出した語りのモチーフがない場合でも、過去についての語りと将来についての望ましい自画像が、景観に記憶されるという仮説にたてば、本プロジェクトでも実施した写真資料提示型調査が有効なはずである。この方法は、インフォーマント自らに写真を提示してもらい、その景観の記憶について語ってもらうというものである。このような方法論を取り入れたものとして、『私とあなたの琵琶湖アルバム』（滋賀県立琵琶湖博物館編、1997）というすぐれた成果がある。琵琶湖畔の1950～60年代の景観や生活の写真を手がかりに、その写真とまったく同じ被写体景観・同じアングルで、1997年に撮影された写真が対比されている。ここには確実に人々の生活の歴史が語られている。

資料提示型の調査によって得られると考えることは、まず、日々生活しているととりたてて気にもとめない景観に、歴史が刻まれているというその歴史意識であり、またその歴史が語られるというその意識化のプロセスである。このプロジェクト期間中に集められた写真のごく一部しかここでは紹介することはできないが、4章「写真で見る川辺の変化」は資料提示型の調査の可能性の一端を示しているだろう。

注

- (1), (2) それぞれ一部を当用漢字に改変した。

参考・引用文献

- 大橋靖史 (1996) : 地震前兆現象を想起する。想起のフィールド, 佐々木正人編 新曜社。
- 大間知篤三 (1975 [1937]) : 四 暮しよかった時。柳田國男編 山村生活の研究 国書刊行会刊。
- 滋賀県立琵琶湖博物館編(1997) : 私とあなたの琵琶湖アルバム。滋賀県立琵琶湖博物館。
- 鈴木寛之 (1998) : <暮らし向きの良し悪し> について。年報・月曜ゼミナール 第3・4合併号。
- 高野陽太郎編 (1995) : 認知心理学2・記憶。東京大学出版会。
- 田主丸町誌編集委員会編(1996) : 田主丸町誌第一巻・川の記憶。田主丸町。
- 柳田國男 (1990 [1922]) : 郷土誌論・村を觀んとする人のために。柳田國男全集27 (ちくま文庫)。筑摩書房。
- 柳田國男 (1990 [1927]) : 青年と学問・郷土研究ということ。柳田國男全集27 (ちくま文庫)。筑摩書房。
- 柳田國男 (1990 [1934]) : 民間伝承論。柳田國男全集28 (ちくま文庫)。筑摩書房。
- 柳田國男 (1990 [1935]) : 郷土生活の研究法。柳田國男全集28 (ちくま文庫)。筑摩書房。